江戸市中の氏子分布に関する考察

「寺社書上」より神社の勧請と再興、遷座の分析を通して

A STUDY OF DISTRIBUTION OF UJIKO IN THE CITY OF EDO

Through analysis of enshrining, reconstruction and relocation of shrines described in “Jisha Kakiage”

小南 弘季^{*1}

Hiroki KOMINAMI

This article is comprised of following 3 aspects.

1. It is discussed that there were two types tutelary shrines for Edo castle town and for each town, samurai residence or temple in the city of Edo by analyzing enshrining and reconstruction of shrines described in “Jisha Kakiage”.
2. Relocations of shrines are described in the transition of the city form of Edo from a medieval town to the premodern castle town by analyzing relocation of shrines described in “Jisha Kakiage”.
3. A distribution of Ujiko towns in the city of Edo is analyzed based of the above investigations.

Keywords: Shrine, Parishioner, Tutelary shrine of land, Relocation of a shrine, Edo, Premodern castle town

神社, 氏子, 鎮守社, 遷座, 江戸, 近世城下町

1. はじめに

東京には現在多数の神社が鎮座しており、極めて複雑多様な氏子域を形成している。これは明治維新以後、戸籍法との連携において近世の氏子分布を再評価することにより、新たに形成された領域である^{注1)}。本論は、主に「寺社書上」に記載された神社の勧請や再興、あるいは遷座に関する実態の分析を通して、近世江戸市中における氏子分布の特徴を読み解くことを試みるものである。

江戸市中における神社に関しては、これまでに多くの研究蓄積があり、都市の中における祭祀を中心とした神主や神職、あるいは都市下層民までも取り込んだ社会集団が構成されていたこと、そしてそれらに対して幕府側からも時期ごとに様々な対策が講じられてきたことが明らかにされている^{注2)}。なかでも神社と氏子の関係性については、都市祭祀の問題として取り扱われることが多く、祭祀に関わる社会集団とその空間構造の解明が進められてきた。

たとえば、久留島浩による神田明神社の天下祭の研究では、江戸の発展による不在地主の出現に伴い祭祀に参加する集団層が変化し、祭祀の質そのものが変化していったことが言及され、竹ノ内雅人による神社社会史の研究では、佃島住吉社を対象として、氏子以外に崇敬者として祭祀に関わる職人集団の存在があったこと、相森稲荷社や四谷稲荷天王合社を素材として、時が下るに従って神社周辺の武家屋敷も氏子同様の扱いをされるようになっていったことが明らかにされてきた^{注3)}。

しかし、これまでの研究は史料制約から、限られた神社に関する主に近世後期の状況を対象としたものに終始し、江戸市中全体における神社と信仰の関係性、特に氏子分布の時代的変遷については未だ解明の糸口を掴めていないといえる。

そこで本研究においては、「寺社書上」および「御府内備考続編」を用いることによる、江戸市中における神社の包括的な分析を試みたい^{注4)}。前者は文政12年(1829)に完成しながらも明治5年(1872)に焼失した地誌、「新編御府内風土記」の編纂時に各寺社より提出させた文書であり、後者は編纂時に備考として作成された資料である。各神社の由緒から当時の氏子、境内地や門前町屋、所蔵物、神職別当などに関する情報を得ることができる^{注5)}。伝承や創作が少なからず含まれている点看過すべきではないが、江戸市中の全体像を包括的に把握するうえで極めて利用価値の高い史料であるといえる。

本稿は以下の構成をとる。まず、次節において文政期江戸市中全域における氏子の復元をおこなう(2節)。次に、徳川入府以降に行われた神社の新たな勧請と社殿再建や朱印地の拝領などによる再興を取り上げ、それを導いた主体とその目的を軸に各神社の鎮守としての性格を分析し、氏子分布形成との関連性を考察する(3節)。さらに、江戸市中において頻繁に行われていた遷座行為を分析し、鎮座地の移動によって引き起こされる神社の意味変化を近世巨大城下町の形成過程に位置づけ、3節を踏まえたうえで、文政期江戸市中における氏子分布の全体像を読解する(4節)。

^{*1} 東京大学工学系研究科建築学専攻 院生・修士(工学)

Grad. Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, The University of Tokyo, M.Eng.

2. 文政期江戸市中における氏子分布の復元

最初に「寺社書上」および「御府内備考続編」により江戸市中における氏子町および武家屋敷の分布（以下、氏子分布）を復元する。前者から110社、それに加え後者のみに掲載された2社（日比谷稲荷社、烏森稲荷社）を対象とした注6）。計112社のうち75社において氏子町名もしくは武家屋敷名が記載されていることを確認し、それらの名称を『復元江戸東京地図』を用いて地図上に同定することで下図（図1）を作成した注7）。

Fig. 1 Territories of Ujiko of shrines in the city of Edo (c.1829)

近世において氏子に関する統一的な制度は存在していない注8）。藩ごとに差異はみられるものの、江戸においては、氏子は慣習的に継承されてきたものである。しかし一方では、のちに言及するように、氏子は町人や武家の信仰の程度によって変化するものでもあった。そのため、文政期における氏子分布の状態が徳川入府以降変化なくあり続けてきたものであると判断してはならない。

文政期江戸市中における氏子分布には以下の特筆すべき点が存在している。①武家屋敷が氏子として計上されていること、②複数神社の氏子となっている町が存在すること、③離れた複数の場所において氏子を有する神社が存在することである。以下では上記3つの論点を軸にして検証をすすめていく。

本論においては近世江戸における鎮守概念を切り口に氏子分布の分析を試みる。氏子を有することと特定の地域や事象に対する鎮守であることを同一視することはできないが、鎮守として祀り上げるという行為が氏子の形成に一定の影響を与えたと考えことに異論はないだろう。次節では、「寺社書上」および「御府内備考続編」にみられる神社の勧請や再興行為を抽出し、各神社の鎮守としての性格の分析を通して、図1に示された氏子分布の読解を試みる。

3. 鎮守と氏子分布

3.1. 「寺社書上」にみる勧請と再興

徳川入府以来、江戸市中において多くの神社が勧請されてきた。勧請とは神仏の分霊を新たに設けた社殿にまつることを意味し、すなわち神社を新たに創建することに等しい。加えて、勧請と同程度に行われてきたのが再興である。本論においては、境内社殿の再建や徳川幕府による朱印地の安堵を中心に、何処の「鎮守」とすると記されたものも含めて再興行為として考える。

下表（表1）は、「寺社書上」および「御府内備考続編」に記載された112社のうち、徳川入府以降において勧請あるいは再興に関する由緒の記述が確認できるものを年代順にまとめたものである。

Table 1 Shrines enshrined or retrieved in the city of Edo

Name of shrine	Year	N / R*	By whom**	Shuin***	Ref.****
Shiba-Shinmei	1591	R+	Ieyasu	15	[51]10,33
Yushima-Tenman	1591	R	Ieyasu	5	[67]6,9
Kanda-Myojin #1	1591	R	Ieyasu	30	[69]45-46
Ryudo-Hachiman	1593-96	R+	the Aoyama	-	[19]35
Mitsuho-Inari	1596	N	-	-	[105]44
Kanda-Myojin #2	c.1603	R+	Ieyasu	-	[69]51
Atago-Gongen #1	1603	N	Ieyasu	-	[53]25
Sekiguchi-Shohachiman	c.1606	N	-	-	[174]
Haramachi-Shinmei	1614	R	town headman	-	[34]14
Fukagawa-Shinmei	1596-1615	N	town headman	-	[106]96-97
Sakashitacho-Suehiro-Inari	1596-1615	N	townsmen	-	[21]88-89
Enokicho-Ryosha-Inari	1615	N	Seiin Hoin	-	[32]14
Kanda-Myojin #3	1617	R+	Hidetada	-	[69]59
Imado-Hachiman	1626	R	Iemitsu	-	[76]47
Fukagawa-Hachiman #1	1627	N	Chosei Hoin	-	[96]18-19
Sakai-Inari	1628	R	townsmen	-	[119]28
Onoterusaki-Myojin	1629	R+	Keiken Hoin	-	[118]26
Fukagawa-Hachiman #2	1631	R	Iemitsu	-	[96]20
Nishikubo-Hachiman	1634	R	Iemitsu	-	[63]88
Atago-Gongen #2	1636	R	Iemitsu	100	[53]28-29
Yotsuya-Inari-Tenno	1637-	R	townsmen	-	[44]50-55
Gojo-Tenjin	1638	R	Iemitsu	-	[115]61
Kurofune-Sansha-Inari	1624-45	R	Myoeni	-	[74]146
Yanokura-Inari	1646	R+	-	-	[74]70-71
Aoyama-Kumano-Sansha	1645-48	N	-	-	[49]49
Kohinata-Dairokuten	1648	R	samurai	-	[25]37
Sendagaya-Shinmei	1649	R+	-	-	[47]47
Karasumori-Inari	1657	R	shogunate	-	[357-358]
Ishiwaracho-Rishin-Inari	1659	R	-	-	[89]28-29
Minamihonjo-Dairokuten	1660	N	temple	-	[91]59
Mita-Inari	1663	N	Kofu Tokugawa	-	[21]34
Kohinata-Hiratsuka-Inari	1672	N	samurai	-	[27]156
Tomisaka-Asahi-Inari	1676	N	the Ogasawara	-	[66]51-52
Hakusan-Gongen	1693	R	Tsunayoshi	30	[65]111
Honjo-Hitotsume-Benzaiten	1693	N	Tsunayoshi	-	[88]46-48
Iwashimizu-Hachiman #1	1693-	N	Tsunayoshi	100	[74]76-78
Kobinata-Shusse-Inari	1698	N	samurai	-	[27]149
Naitoshinju-Inari	1698	R+	Owari Tokugawa	-	[46]51
Azabu-Fujimi-Inari	1698	N	Tsunayoshi	-	[24]119
Susaki-Benten	1700	N	Tsunayoshi	-	[95]93
Ichigaya-Hachiman	1702	R	Keishoin	-	[36]52-54
Akasaka-Engi-Inari	1688-1704	N	samurai	-	[39]101
Nezu-Gongen	1706	R+	Tsunayoshi	500	[72]10-11
Iwashimizu-Hachiman #2	1708	R	Tsunayoshi	100	[74]78
Yaba-Inari	-	N	Tsunayoshi	-	[65]42
Akasaka-Hikawa	1729	R+	Yoshimune	200	[41]30,34
Ichio-Hachiman	1731	R	townsmen	-	[74]37-38
Tamagawa-Inari	1716-36	N	-	-	[39]8

*N: new enshrining R: reconstruction R+: reconstruction with relocation

**boldfaced type presents Shogun and very close people

***domain authorized by the Edo shogunate (koku)

****reference: [volume]number of 'Jisha Kakiage', (page) of 'Gofunai Jisha Biko'

表 1 には、各神社の勧請 (N) あるいは再興 (R) を主導した主体と氏子の有無を、そして朱印地が安堵された神社にはその石高を記載している。また神社の再興には遷座をとまなうことが少なくないため、その場合は (R+) と記載した。社殿の建立に関しては、繰り返し行われた記録がある場合であっても、再興を行う主体に特別の変更がない限りは初回の再建時のみを扱っている^{注 9)}。

3.2. 徳川將軍家による勧請および再興

表 1 からは、こうした勧請や再興行為が將軍家によるもの(太字)とそれ以外の江戸の居住者によるものに大別されることが読み取れるだろう。徳川入府以降、47 回の勧請および再興行為が確認できるが、そのうちの 19 回が徳川家將軍によるものであった。

五代將軍綱吉が比較的多くの神社の勧請に携わっていることを別にすれば、新たに勧請するよりは従来の神社を再興することに積極性をもっていったことが全体の傾向としてみられる。もっとも基本となる再興手段は社殿の再建であり、4 節において詳述するように遷座と社地の下賜が同時に行われることも少なくなかった。それに加えて將軍家による神社政策を特徴づけるのが朱印地の安堵である。

まずは江戸市中の骨格が完成したとされる三代將軍家光までの時期における神社政策をみていく。

初代將軍家康による神社への介入は、天正 19 年(1591)の日枝山王社、神田明神社、芝神明社、湯島天神社に対する朱印地の安堵に代表される^{注 10)}。同年家康は関東一円の寺社に対して朱印地を安堵しており、上記 4 社への朱印地安堵もその一環として考えられる。また、市谷八幡宮において神社の由来を奏達できなかったために朱印状を拝受することが叶わなかったと伝えられていることから、一定の選抜のうえで上記の朱印地安堵が行われたと考えられる。

一方で家康は、慶長 8 年(1603)に江戸における防火の惣鎮守として京都から愛宕権現社を勧請しているが、先にも述べたように將軍によって勧請された神社は多くはなかった^{注 11)}。愛宕権現社も江戸全体の防火という特別な祈願を期待して創建されたものであり、再興されたほかの神社とは異なる文脈で捉えるべきである。

二代將軍秀忠在位時は、神田明神社を仮の社地から再遷座し、新境内を造営した以外の再興行為は行われなかったのに対し、家光は一転して 6 社もの神社を再興している^{注 12)}。先の愛宕権現社に 100 石の朱印地を安堵しているほかは社地の下賜や社殿の建立がおもとなっているが、なかでも当時はまだ小島であった深川永代島の地において行われた長盛法印による深川八幡宮の創建に関与していることは後述するような江戸の開発と鎮守形成の関連において注目すべき事例であるといえるだろう^{注 13)}。

上記の一連の再興事業を経たのち、半世紀以上ものあいだにわたり將軍家の介入がみられないことから、徳川入府以来の神社再興事業は家光によって一端の終息を迎えたと考えられることができる。そして 17 世紀末以降再び行われるようになる將軍家による神社への介入は徐々に私的性格を帯びたものへと変化していく。

五代將軍綱吉は「寺社書上」よりわかる範囲においてももっとも積極的に神社への介入を行った將軍である。白山権現社は特に綱吉とその生母桂昌院の信仰厚い神社であり、元禄 6 年(1693)に 30 石の朱印地を安堵している。また、同年浅草蔵前に石清水八幡宮を勧請し、こちらにはのちとあわせて 200 石の朱印地を安堵している。

石清水八幡宮は江戸城鬼門除けならびに將軍家祈願所として 300 両を投じ創建された神社であり、与えられた朱印地の量からも先の愛宕権現社と同様の文脈において語られるべきであると考えられる。その一方で、白山権現社は、綱吉の屋敷地として社地が召し上げられ、遷座された経緯を踏まえると、綱吉の個人的信仰による寄進を受けていたと考えるのが妥当である^{注 14)}。

さらに綱吉は召抱の鍼師であった杉山和一檢校に屋敷を拝領、その隣地に杉山の信仰していた江島弁財天社を勧請する、あるいは自身の屋敷である白山御殿や麻布御殿の邸内に稻荷社を勧請するなど、私的性格が強いといえる勧請を行っている^{注 15)}。また、桂昌院の懇願をうけ洲崎に弁天社を勧請したり、市谷八幡宮を再興したりしているのも上記と同様、私的なものであると考えられる^{注 16)}。

それに加え、宝永 1 年(1704)より駒込惣鎮守であり六代將軍家宣の産土社でもある根津権現社を、千駄木村より家宣の生家であった根津邸跡地に遷座造営し、500 石の朱印地を安堵している^{注 17)}。このように將軍の産土社に対して特別な待遇を図る行為は八代將軍吉宗によっても行われており、享保 14 年(1729)に自身の産土社である赤坂氷川社を赤坂一ツ木町より今井台に遷座造営し、200 石の朱印地を安堵したことが確認できる。これらはともに將軍による私的な寄進として考えることができるだろう^{注 18)}。

3.3. 江戸居住者による勧請および再興

他方において、江戸居住者によっても新たな神社が勧請されたり、従来鎮座していた神社が再興されたりしていた。介入の主体によって単純に分類すると、(α . 町人/ β_1 . 下級武士/ β_2 . 大名家/ γ . 僧侶)となる。以下において事例をもとに各主体が勧請あるいは再興した神社の性格を検証する。

α . 町人による勧請、再興

表 1 において「town headman (町名主)」や「townsmen (町人)」によるとあるものが α に属する。深川の草分名主である深川八郎右衛門が深川の鎮守として勧請した深川神明社や「坂下町草分之鎮守」とある末広稻荷社のように、土地や町の開発に際して勧請された神社が多くみられる一方で、池之端の境稻荷社のように文明年間(1469-86)より同所に鎮座している古社を、「此辺みな町屋となりし時鎮守と」した事例もみられる^{注 19)}。また、時代は下るが、銀杏八幡宮のように、従来福井藩松平家上屋敷内に鎮座していた邸内社が、屋敷地が公収され町屋が開かれた際に新町人主体の「鎮守公認運動」を通して幕府に公認され、町の鎮守となった事例も存在する^{注 20)}。

β_1 . 下級武士/ β_2 . 大名家による勧請、再興

組屋敷や大名屋敷に鎮守として勧請あるいは再興された邸内社を出自とする神社が存在おり、当時「麻布永坂鎮守」とされていた三田稻荷社のように、元来は屋敷鎮守として勧請されたものが次第に周辺の信仰を獲得し、のちに屋敷外に社地を拝領したとされる神社が事例として挙げられる^{注 21)}。屋敷鎮守の多くは綱吉と同様、邸内へ新規勧請されたものであった一方で、龍土八幡社のように他所に鎮座していた神社を鎮守として邸内に遷座した例もあった^{注 22)}。

また、屋敷地を拝領した際に元来その土地に鎮座していた社祠を取り囲みそのまま鎮守として奉祀するといった事例がみられる。こうした状況は寺院境内においても同様に生じていたことであり、江戸城下の建設と神社をめぐる重要な問題といえる^{注 23)}。

γ. 僧侶による勧請、再興

代表的なものは寺院境内における境内鎮守であり、「寺社書上」において各寺院の付属社として記載されている^{注 24)}。前述の邸内社と同様に、寺院移転後同所に社地を拝領した牛込榎町の両社稲荷社や、修験者が寺院の依頼をうけ境内の隣地に勧請した南本所の第六天社は独立した神社として掲載されている^{注 25)}。一方で本郷真光寺の天神社や浅草寺の三社権現社のように寺院境内に鎮座しながら付近の町の鎮守として奉祀されている境内社も存在している^{注 26)}。

また、先述の深川八幡宮や寛永寺開山にともなう遷座ののち慶賢法印により坂本村の鎮守として再建された小野照崎明神社、神職小川采女によって再興された千駄ヶ谷神明社のように、特定の僧侶の尽力による勧請や再興が確認できる神社もある^{注 27)}。

3.4. 近世江戸市中における鎮守概念と氏子

ここまで近世江戸市中における神社の勧請や再興行為をさまざまな信仰主体に細分化し考察してきたが、「江戸居住者による勧請、再興」のおおよそすべてが町や村、武家屋敷など特定の場所に対する鎮守を期待したものであったこと、なかには銀杏八幡宮や三田稲荷社のように鎮守対象が変化する、あるいは複数の鎮守対象を有するようになった神社が存在することが確認できた。特に、四谷や深川のように広範囲の地域を拝領し開発した際には、そうした地域一帯に対する「惣鎮守」として神社を勧請あるいは再興している^{注 28)}。

一方、「徳川将軍家による勧請および再興」が行われた神社のうち直接的に鎮守化について言及されているものは限定的であり、綱吉による屋敷鎮守の勧請を除けば、江戸の防火惣鎮守として勧請された愛宕神社や江戸城の鬼門除けとして勧請された石清水八幡宮、あるいは「江戸惣鎮守」として再建された神田明神社のように、特定の場所というよりは江戸全体の鎮守を目的としたものであった^{注 29)}。

しかし実際には、将軍家による朱印地の寄進や境内の再建を受けた神社の多くが、徳川入府以前より広範囲の地域における「惣鎮守」として崇敬されてきた神社であったといえる。神田明神社や芝神明社は幕府の祈願所となる以前は、神田や飯倉といった特定の地域における鎮守であったし、他にも湯島天満社や今戸八幡宮、深川八幡宮、西久保八幡社、五條天神社、白山権現社、市谷八幡宮、根津権現社、赤坂氷川社など、将軍家より寄進をうけた神社の多くが「惣鎮守」として人びとに信仰されていたのである^{注 30)}。

他方で、「寺社書上」において他の信仰主体による介入が確認されない神社のなかにも、徳川入府以前の鎮守領域を継承していると考えられる古社が確認できる^{注 31)}。このことより鑑みると、江戸市中における土地を対象とした鎮守概念は、古来よりの鎮守領域と徳川入府以降の新たな地域開発とともに形成された鎮守領域の継ぎ接ぎによって成立しているといえるだろう^{注 32)}。

以上のようにさまざまな鎮守社が存在しているなかで、文政期当時において氏子を有していたのは、特定の地域や場所に対する鎮守となっていた神社であり、前述の愛宕権現社や石清水八幡宮などに氏子は確認できない。氏子は信仰の一形態であり、他の社会集団や近隣の有志によって奉祀維持されている神社も多く存在している^{注 33)}。近世後期において崇敬者と氏子を明確に線引きすることは困難であるが、本論において重要であるのは特定地域の鎮守を目的に奉祀される神社がその地域の町人や武士を氏子としていることである。

図 1 からわかるように、文政期江戸市中においては、数町のみ的小規模なものから、数十町にわたり武家屋敷までもを包括した都市スケールのものでさまざまな範囲の氏子分布が形成されていた。

3.5. 「惣鎮守」の氏子分布

まずは「①武家屋敷が氏子として計上されていること」から検討していきたい。この問題に関しては、竹ノ内の研究により一部明らかにされている。竹ノ内は祭礼における神輿の巡幸路や経費負担分を検討することによって武家による祭礼への関与を指摘しているが、おそらくはそうした武家が「寺社書上」において氏子として記載されていたと考えられる^{注 34)}。

武家を氏子とする神社は 2 通り存在していた。一つは麻布御殿の富士見稲荷社のように屋敷鎮守として勧請された神社であり、周囲の比較的小規模な範囲における武家屋敷を氏子としている^{注 35)}。他方は町と武家屋敷をともに氏子としている神社であり、地域一帯を縄張りしたような氏子分布を形成しているところに特徴がある^{注 36)}。

上記のような一定の範囲の内側に住む人びとをみな氏子としている神社は多くないが、こうした氏子分布の存在から、都市スケールの広域な範囲に対する鎮守とそれを信仰する氏子というような、領域的な境界認識によって結びついた関係性が江戸市中において成立していたことが推察される。

また、江戸市中においては町のみを氏子とする神社が大半を占めているが、これらのうちのいくらかは前述の町と武家屋敷を氏子とする神社と同様、領域的な境界認識に基づくと考えられる氏子分布を有していることが図 1 において確認できる^{注 37)}。

以上で述べてきた神社は前項において言及した「惣鎮守」と呼称される神社と同一であり、それらの氏子分布は一部を除いて互いに浸食することなく領域を区分しているのであった^{注 38)}。

3.6. 複層する氏子分布

前項の議論のみによっては、江戸市中において「②複数神社の氏子となっている町が存在する」ことの理解が困難となる。先に結論をいうと、領域的に分割された氏子分布上に、少数の町や武家屋敷によって構成された小規模な氏子共同体が成立している構造こそが江戸市中における氏子分布の最大の特徴であると考えられる。

後者の神社は 3 節 3 項において言及した、町の鎮守や組屋敷の鎮守、屋敷鎮守などと相似するものであるといえる。これらの神社は勧請、再興年代の古新に関わらず存在しているが、前者の神社とは異なり、将軍家による介入をうけたものは少ない。

この小規模な氏子分布は、広範囲の領域的な氏子分布に沿うようにして形成されている場合もあれば、内部に独立して成立している場合、あるいは②のように多重氏子として存在している場合も確認できる^{注 39)}。こうした差異は勧請あるいは再興の年代や鎮座地の性格に起因した信仰の強度によるものと考えられるが、いずれにせよこのような信仰の密度を異にした複層性が近世後期の江戸市中における氏子分布を特徴づけているといえるだろう^{注 40)}。

以上において、神社の勧請や再興を軸にその鎮守としての性格を分析することで、近世後期の江戸市中における氏子分布の複層性について検証してきた。本節では江戸市中において頻繁に行われていた遷座が氏子分布の形成に与えた影響を検討したい。

4. 遷座と氏子分布

4.1. 巨大城下町における遷座

これまでと同様に「神社書上」および「御府内備考続編」において確認できる遷座の事実を、その目的および主体とともに年代順にまとめたものが次の表 2 である。

Table 2 Shrines relocated in the city of Edo

Name of shrine	Year	For / By*	From**	Ref.***
Shiba-Shinmei	c.1591	Ieyasu	-	[51]8
Ryudo-Hachiman #1	1593-96	the Aoyama	-	[168]
Kanda-Myojin #1	c.1603	Ieyasu	-	[69]51
Hibiya-Inari	1606	-	-	[348]
Tsukudo-Myojin	1615	Goyochi, Edo castle	-	[30]38
Kanda-Myojin #2	1616	Hidetada	-	[69]7
Hakusan-Gongen #1	1616	-	-	[65]107
Sakurada-Inari #1	1596-1624	Goyochi, Edo castle	-	[20]7-8
Ryudo-Shinmei	1615-24	Goyochi	-	[18]186
Sendagaya-Shinmei #1	1615-24	-	-	[47]39-40
Sakurada-Inari #2	1624	-	-	[20]8
Mita-Hachiman	1628	-	-	[3]31
Onoterusaki-Myojin	1629	Kannei-ji	T	[118]26
Yotsuya-Inari-Tenno	1634	-	-	[44]50-55
Sendagaya-Shinmei #2	1642	-	-	[47]40
Ryudo-Hachiman #2	1624-44	Kegare / the Aoyama	S	[19]35
Naitoshinjuku-Inari	1624-44	Yashiki Goyochi	S	[46]50-51
Tsurugaoka-Hachiman	1645	Goyochi	-	[31]6
Shintorigoe-Atsuta-Myojin	1646	Goyochi	-	[78]6 7
Tarigoe-Myojin	1646	Goyochi	-	[73]7-8
Koishikawa-Hikawa #1	1652	Yashiki Goyochi	-	[249]
Moto-Hikawa-Myojin	1654	-	S	[19]6
Tanaka-Hachiman	1655	Kakae-yashiki	-	[27]139
Hakusan-Gongen #2	1655	Yashiki Goyochi	-	[65]107
Gojo-Tenjin #1	1657	Kannei-ji	T	[115]62
Azabu-Honmura-Hikawa	1658-61	Yashiki Goyochi	-	[23]6-7
Tsumagoi-Inari	1658-61	Goyochi, fire	-	[70]7-8
Shiba-Akabane-Inari #1	1676	Zojo-ji	T	[62]56
Takecho-Inari	1678	Goyochi	-	[21]48
Shitaya-Inari	1680	attached temple	T	[115]75
Komagata-Shimizu-Inari #1	1689	-	-	[74]117
Hisakuni-Inari	1690	Goyochi	-	[17]28
Sakashita-Suehiro-Inari	1692	Goyochi	-	[21]88
Suzufuri-Inari	1695	Goyochi	S	[40]7
Yanokura-Inari	1698	-	-	[74]71
Koishikawa-Hikawa #2	1699	-	-	[249]
Komagata-Shimizu-Inari #2	1704	-	-	[74]117
Nezu-Gongen	1706	Ienobu	S	[72]10-11
Gojo-Tenjin #2	1680-1709	-	-	[115]62
Komagata-Shimizu-Inari #3	1710	-	-	[74]118
Shinmachiya-Goryo-Inari	1710	Kannei-ji	T	[71]7
Asakusa-Mishima-Myojin	1704-11	Goyochi	-	[440]
Shiba-Saiwai-Inari	1713	Goyochi, mausoleum	-	[50]21
Shinozuka-Inari	1719	Goyochi, fire	-	[74]8-9
Asakusa-Dairokuten	1719	Goyochi	-	[74]18-19
Akasaka-Hikawa	1729	Yoshimune	-	[41]30
Iwashimizu-Hachiman #1	1732	Hiyoke Goyo-chi	T	[74]76
Kurofune-Sansha-Inari	1732	Goyochi, fire	-	[74]148
Fukagawa-Kurohfuno-Inari #1	1732	Goyochi, fire	-	[95]51
Iwashimizu-Hachiman #2	1744	return to origin place	-	[74]77
Fukagawa-Kurohfuno-Inari #2	1764	-	-	[95]51
Shiba-Akabane-Inari #2	1787	Hiyoke Goyochi	-	[62]57
Yukiju-Hachiman	-	-	-	[174]
Kanasugi-Inari	-	-	S	[298]
Azabu-Fujimi-Inari	-	Goyochi	S	[24]118
Fukagawa-Hatsune-Inari	-	-	-	[106]133

*boldfaced type presents Shogun

**non-scription: shrine precinct S: samurai residence T: temple precinct

***reference: [volume]number of 'Jisha Kakiage', (page) of 'Gofunai Jisha Biko'

江戸市中における遷座は、以下において述べるようにさまざまな理由をもって神社奉行の指示をうけ執行されたものが主であるが、なかでも遷座を企図した人物名が記述されている場合には、それらを「For / By」として掲載し、特に將軍家の関与がみられるものは太字で表記した^{注 41)}。また、「From」の項には遷座以前の社地の種別 (-: 神社境内 / S: 武家屋敷地 / T: 寺院境内) を記載した^{注 42)}。

4.2. 遷座の主体とその目的

表 2 に列挙された遷座理由のうちもっとも多数を占めるのが幕府による御用地としての境内地の収用である。初期には江戸城郭拡大建設の用地となり遷座された神社が数社みられ、時代が下ると大名屋敷の用地や火除地として遷座される、あるいは類焼の結果替地されるといった事例が大半を占めるようになる^{注 43)}。なかには桜田稲荷社や浅草新鳥越町の熱田明神社、本郷新町屋の御霊稲荷合社などのように周辺の氏子町ごとと他所へ移転された事例もみられる^{注 44)}。

また、小野照崎明神社や五條天神社のように寛永寺や増上寺といった巨大寺院の開山や境内の更新に際し、旧来その地に鎮座していた神社が境外へ遷座された事例も確認できる。幸稲荷社のように増上寺境内における將軍家の霊廟建設に伴う遷座もみられる^{注 45)}。

以上のように鎮座地が収容され遷座を余儀なくされた際には境内地および境内町屋の存続という問題が生じるが、もとより社地の拝領あるいは拝借を認可されていた神社に関しては、それらの規模が維持される方針となっていた。信仰の根源である土地との繋がりを失うという点においては、遷座自体は消極的な出来事であるといえるが、一方で、江戸市中においては以下のように状況の好転を企図して行われた遷座も一定数存在している。

まず興味深い事例として下谷稲荷社の遷座を取り上げたい。下谷稲荷社の別当寺は、現在の社地を抱地としていた谷中天眼寺少林庵と交渉し、幕府の許可を得て自主的に替地を行った。この結果、同社の社地は 126 坪から 525 坪にまで増加している^{注 46)}。

次いで、3 節 3 項において言及した三田稲荷社の一件や、尾張藩主徳川継友が邸内社であった稲荷社を屋敷外へ排出し内藤新宿の鎮守として再興した一件のように、屋敷地や寺院境内から付近に排出される場合も、遷座に際して相応の社地が幕府より拝領されるか、あるいは奉祀主体から土地が寄付されている^{注 47)}。特に、邸内社の屋敷外への排出は、本来私的な祭祀であったはずの邸内社が外部からの信仰を集めすぎたことによって引き起こされるものであり、遷座による鎮守対象の転換が企図されたものと考えられる^{注 48)}。

上記のような境内地の拡大や鎮守対象の転換を目的とした遷座は、將軍家による神社の再興事業においても積極的に行われてきた。

たとえば、平将門を奉祀していた神田明神社は庶民や武将の崇敬をうけていたと同時に鎮座地である芝崎村一帯の惣鎮守であったが、徳川入府以後、江戸城拡大にともなう湯島台地上への遷座を通して、江戸町人の惣鎮守ならびに幕府の祈願所へと転換された。同様に芝神明社も増上寺の裏手から門前の街道沿いへと遷座され、街道沿いに開かれた芝一帯の惣鎮守ならびに幕府の祈願所となっている^{注 49)}。

また、時代は下るが、駒込惣鎮守であった根津権現社は家宣の産土社とされた際に甲府屋敷跡地を拝領、千駄木村より遷座された。同じく赤坂惣鎮守氷川社も吉宗の産土社として赤坂の町人地附近から武家屋敷が一帯を占める今井台へと遷座している^{注 50)}。

以上のような幕府主導の強固な介入の意図を有する遷座が既存神社の価値を再編し、以後における信仰の礎石となったことは疑うべくもない。他方で、17世紀前半においては江戸城拡大にともなう移転も含め多くの遷座が行われているが、龍土神明社(麻布龍土一帯)や本村氷川社(麻布本村一帯)のように、幕府による再興の有無に関わらず、のちに遷座先一帯における惣鎮守となった神社も少なくない^{注 51)}。町の起立が充分には判らないため、それらの地域と神社の関係由緒を追究することには困難がともなうが、上記の遷座も同様に江戸における鎮守形成に影響を与えたことは確かである。

4.3. 揺れ動く氏子分布

ここまで、氏子を神社における根源的な存在として取り扱ってきたが、実際には氏子組織の内部において神社との関係性の強さには差があり、宮元町を中心とする神社周辺の町とそれ以外の町とでは祭礼における役回りが異なるといった指摘がなされている^{注 52)}。

上記のような関係性の強弱が顕著にあらわれているのが、遷座を経験した神社の氏子分布である。文政期には「③離れた複数の場所において氏子を有する神社が存在」しているが、これは遷座後の氏子分布にあらわれる状況の1つであり、実際には(④遷座前の社地の周囲のみに形成／㊦各々の社地の周囲に離れて形成／㊧遷座後の社地の周囲のみに形成／㊨両社地を一円に取り囲むように形成)された氏子分布が存在していた。

まず、㊨の氏子分布は神田明神社や芝明神社に代表されるように、広域な範囲に対する鎮守として遷座された神社に多くみられる状況であり、遷座の距離は短く、従来の鎮守領域内を移動しているか遷座によって鎮守領域が拡大したものであると考えられる。遷座前の社地が寺院境内や屋敷地に転換され、信仰主体の形成が不可能となっている場合や、遷座後にはじめて鎮守として信仰された場合、あるいは前述のように神社と氏子町がともに移転した場合には㊦のような状況になっている場合が多い。

次いで㊦の氏子分布は、築土明神社や黒船三社稲荷社、赤坂鈴降稲荷社、深川初音稲荷社のように小規模な氏子分布を有する神社に多くみられる。これらは土地と信仰が乖離しているという点においてある種もともと都市的な状況であるといえる。㊨の氏子分布については、氏子町の一部が替地されたことによって生じたものを除くと、旧社地に対する信仰が持続しているか復古的に再生したかのいずれかの状況であると考えられ、桜田稲荷社や三田八幡宮などにみられるように旧社地の周辺町のみが氏子となっているものが多い。

遷座を原因とした氏子の変動の様子がよくわかるものとして白山権現社が挙げられる。同神社は当時鎮座地であった白山一帯とともに元和2年(1616)の遷座前に鎮座していた本郷一帯を取り囲む広域な範囲を氏子とし、隔年の渡御祭礼時には旧地である本郷元町および竹町を御旅所として神輿巡幸を行っていたと「寺社書上」に記載されている^{注 53)}。しかしながら、実際には享和2年(1802)を最後に祭礼は中絶しており、祭礼の中絶以降本郷一帯の住民たちによる信仰は近在の湯島天神社や真光寺天神社に流れてしまったという^{注 54)}。

上記の白山権現社のように祭礼が中断していたり、従来の氏子を喪失したりしている神社が「寺社書上」においても少なからず確認できる^{注 55)}。そうしたことから、神社と氏子の関係性が恒久的なものでなかったことは明らかであるといえるだろう。

以上において、神社の遷座の性格とそれに応じて変動する氏子分布について考察を行ってきたが、その結果、神社の規模が惣鎮守レベルか小規模な鎮守であるかによって、神社との物理的な距離に対する人びとの信仰の強度が異なることに気づくことができる。

これまでの議論を併せて考えると、元来江戸の各地域における惣鎮守が信仰の範囲を維持(あるいは遷座を通して拡大)する一方で、その上に小さな共同体を信仰主体とする神社が発生し、それらは土地よりも共同体に依存するものであったが、遷座などを経験しながら時間の経過とともに土地に所属するようになり、浅草や芝麻布、小石川などでみられるような江戸においても特に複雑な氏子分布が形成されていったと考えることができるのである。

5. おわりに

本稿では地誌編纂資料における情報の断片を包括的に分析することによって、近世後期の江戸市中における氏子の全体像を論じてきた。結果として、近世以前より維持されてきた領域的な氏子分布と徐々に形成される個別の小規模な氏子分布による複層構造を基本としながら、遷座を通してさらに複雑化する構造を掴むことができた。

近世後期の江戸市中における資本の集積の進展とともに古来の町人が不在地主化していったことは周知のとおりであるが、それに並走して氏子組織は形骸化し、その結果祭礼の質も変化していったことが指摘されている^{注 56)}。土地の開発にまつわる神社と氏子としての契約関係は一部の町人を除いて失われ、慣習的な共同体維持の理念をもちながらも現世利益を求める信仰との狭間に揺れ動く氏子共同体が、近世後期の江戸市中において複雑多様に形成されてきた氏子分布の内層に息づいていたといえるだろう。

注

- 注 1) 小南弘季「明治初頭における氏子域の成立—明治東京の氏子域に関する復元的考察(その1)」(『日本建築学会計画系論文集』第82巻第735号、2017年5月)、同上「明治初頭における氏子域の空間的特性—明治東京の氏子域に関する復元的考察(その2)」(同上、第83巻第743号、2018年1月)、同上「明治初頭における氏子域の空間的特性—明治東京の氏子域に関する復元的考察(その3)」(同上、第84巻第762号、2019年8月)。
- 注 2) 高埜利彦『近世日本の国家権力と宗教』(東京大学出版会、1989年)、井上智勝、高埜利彦編『近世の宗教と社会 2』(吉川弘文館、2008年)、高埜利彦編『シリーズ近世の身分的周縁 1 民間に生きる宗教者』(吉川弘文館、2000年)、吉田伸之編『身分的周縁と近世社会 6 寺社をささえる人びと』(吉川弘文館、2007年)など。
- 注 3) 久留島浩「祭礼の空間構造」(高橋康夫、吉田伸之編『日本都市入門 1 空間』東京大学出版会、1989年所収)、竹ノ内雅人『江戸の神社と都市社会』(校倉書房、2016年)。
- 注 4) 「寺社書上」(国立国会図書館所蔵、802-42)。「御府内備考続編 神社部」(東京都公文書館所蔵)、本研究においては上記の写影本である『御府内寺社備考 第一冊 神社』(名著出版、1986年)に拠る。寺社より提出された原史料である「寺社書上」を主史料としながら、「御府内備考続編」によって補足された分をも対象とする。「御府内備考続編」を用いた研究として、寺院を扱った伊藤毅「江戸寺院への視角—近世の巨大都市と寺院」(都市史研究会編『年報都市史研究 3 巨大城下町』山川出版社、1995年所収)、日塔和彦「江戸御府内寺院の全体的把握—『御府内寺社備考』研究」(『建築史の鉤脈—大河直躬先生退官記念論文集』中央公論美術出版、1995年所収)神社を扱った伊藤裕久「江戸・東京の祭礼空間—伝統都市の分節構造」(同上『年報都市史研究 12 伝統都市の分節構造』山川出版社、2004年所収)などが挙げられる。後者は特に近代移行期における祭礼空間に関する論考であり、近世後期の氏子分布が大まかながらも復元され、日枝神社と神田神社において近世近代の比較が行われている。
- 注 5) 朝倉治彦『御府内寺社備考 別冊』(名著出版、1986年)、pp. 89-90。両史料ともに郭内の神社については一切掲載されていない。

注 6) 品川、白金（一部）、渋谷（一部）地域については「御府内備考続編」から除外されている（本論においても品川は扱わない）。また、小日向日輪寺氷川社、本郷真光寺天神社、山谷日本堤合力稲荷社、深川佐賀稲荷社、浅草寺三社権現社は「御府内備考続編 寺院部」において掲載されている。

注 7) 吉原健一郎、俵元昭、中川恵司編『復元江戸東京地図』（朝日新聞社、1994 年）。図版の大きさの制約により、町単位の描出が不可能であったため、氏子分布の範囲を簡略化した表現とした。

注 8) 萩原龍夫『中世祭祀組織の研究』（吉川弘文館、1962 年）、米地実『村落祭祀と国家統制』（御茶ノ水書房、1977 年）など。

注 9) すべての神社において再興事業の詳細が記載されているわけではなく、単に「再興」されたとのみ記述されている神社もあるため、表 1 においては再興行為の内容までを問うことはしない。

注 10) 『日枝神社史』（日枝神社御鎮座五百年奉賛会、1979 年）pp. 938-939。前掲注 4「寺社書上」[69]コマ番号 45-46。同上[51]コマ番号 10。同上[67]コマ番号 6。

注 11) 「寺社書上」は郭内の記載を欠いているため、本稿ではとりたてて取り上げることはいないが、前掲注書『日枝神社史』pp. 940-948 によると、日枝山王権現社は元和 3 年（1617）秀忠より 100 石、寛永 12 年（1635）に家光より 600 石の朱印地を拝領している。

注 12) 前掲注 4「寺社書上」[53]コマ番号 25。

注 13) 前掲注 4「寺社書上」[96]コマ番号 18-19 には、長盛法印が勧請の段より家光に窺いをたてていたことが記されている。また、「新編武蔵風土記稿」においては砂村新田の富賀岡八幡宮が旧地であるとされている。

注 14) 東京都神社庁編『東京都神社名鑑』（東京都神社庁、1986 年）pp. 59-60、前掲注 4「寺社書上」[74]コマ番号 76-78。同上[65]コマ番号 111。

注 15) 前掲注 4「寺社書上」[88]コマ番号 46-48。同上[65]コマ番号 42。同上[24]コマ番号 119。

注 16) 前掲注 4「寺社書上」[95]コマ番号 93。同上[36]コマ番号 52-54。

注 17) 前掲注 4「寺社書上」[72]コマ番号 10-11。

注 18) 前掲注 4「寺社書上」[41]コマ番号 30, 34。

注 19) 前掲注 4「寺社書上」[106]コマ番号 96-97。同上[21]88。前掲注 4『御府内寺社備考 第一冊 神社』p. 286。

注 20) 吉田正高「江戸の鎮守公認運動と地域における鎮守意識」（『民衆史研究』55、1998 年 5 月）によれば、町鎮守として公認されることが社地の拝領につながっていた。

注 21) 前掲注 4「寺社書上」[21]コマ番号 34。

注 22) 前掲注 4「寺社書上」[19]コマ番号 35。

注 23) 前述の銀杏八幡宮をはじめ、徳川入府以前より鎮座する神祠を武家屋敷や寺院が取り囲み、のちに社殿を建設したものに由来する神社は多い。

注 24) 境内鎮守は前掲注 4「寺社書上」において「境内鎮守〇〇社」のように記載され、他の境内社と区別されていることがある。多くは社殿の寸法が示されているのみであるが、稀に縁起が掲載されていることもある。

注 25) 前掲注 4「寺社書上」[32]コマ番号 14。同上[91]コマ番号 59。

注 26) 前掲注 4「寺社書上」[71]コマ番号 53。同上[84]コマ番号 18-19。

注 27) 前掲注 4「寺社書上」[118]コマ番号 26。同上[47]コマ番号 47。

注 28) 四谷天王稲荷両社は、日本橋大伝馬町名主の主馬込勘由が四谷一帯を拝領した際に、「一ツ木村之鎮守」であった稲荷社を鎮守として当地に遷座し、さらに神田明神社境内の牛頭天王社を勧請、のちに相殿にしたものである（前掲注 4「寺社書上」[44]コマ番号 50-55）。『日本国語大辞典』において「惣鎮守」あるいは「総鎮守」は「国または土地の全体をやすらかに守ること。また、その神。総社。」とされており、現在にいたるまで使用されている。鈴降稲荷社が「四谷仲町御持組惣鎮守」と記されるように（同上[40]コマ番号 18）、「惣鎮守」という言葉自体は広い範囲で使われているが、多くは地域一帯の鎮守を示す際に使用されるため、本稿においてもそのような意図をもって使用する。

注 29) 神田明神社は将軍家が上覧する天下祭を行う本社と境内に末社として鎮座する元来の地主神である牛頭天王三社の二重構造になっている（前掲注 4「寺社書上」[69]コマ番号 8-44, 62-68）。図 1 においては国役としての氏子である前者の氏子を記載している。

注 30) 特に日枝山王社、神田明神社、芝神明社、根津権現社、赤坂氷川社、白山権現社は、宝暦期の神社取り調べにおいて「大社」と表現されており、他神社とは格式が異なっていたことが竹ノ内によって指摘されている（竹ノ内前掲注 3 書、pp. 30-34）。

注 31) 「千駄箇谷惣鎮守」の八幡宮（前掲注 4「寺社書上」[47]コマ番号 108）、「青山惣鎮守」の熊野三社権現社（同上[49]コマ番号 48）など。

注 32) 萩原前掲注 8 書において、萩原は京都祇園社の「敷地役」に関する岩

橋小彌太、中村直勝、小島鉦作による議論を取り上げ、豊臣秀吉支配下の京都においては神社の氏子が領主秀吉によって「敷地役」として安堵されていることを指摘し、城下町における領主権と氏子の関係性を示唆している。推論でしかないが、従来の農民を移住せしめ新たに町や屋敷を建設した江戸市中において一定範囲内での氏子分布が成立しているのは、鎮守＝氏子の安堵という図式によって一定範囲の領域ごとに鎮守が割り振られたからではないだろうか。

注 33) 例えば、赤坂御門外の玉川稲荷社は氏子ではない町の「持」である（前掲注 4「寺社書上」[39]コマ番号 11）。また、関口水神社のような水関係の鎮守社に氏子をもたないものが多い。

注 34) 竹ノ内前掲注 3 書において指摘されているのは崇敬者としての武家の立場であり、氏子とは異なるように考えられるが、文政期においてはそうした武家も氏子と同等のものとして考えられていたのであろうか。「寺社書上」には個人名をもって列挙している神社もあることから、個人的な信仰であった可能性も考えられる。

注 35) 前掲注 4「寺社書上」[24]コマ番号 119。

注 36) 芝神明社、龍土神明社、西久保八幡社、若宮八幡宮、築土八幡宮、千駄ヶ谷八幡社、関口正八幡宮、赤坂氷川社、白山権現社の本郷一帯、赤城明神社、五條天神社が事例として挙げられる。

注 37) 市谷一帯における市谷八幡宮、麻布一帯における麻布本村氷川社、四谷一帯における四谷天王稲荷両社、鳥越一帯における鳥越明神社などが明快な例として挙げられる。

注 38) 小石川氷川社と根津権現社、深川八幡宮と深川神明社の氏子分布が大きく重なり合っている他は、同等規模の氏子分布が重なり合うことはない。

注 39) 沿うようにして形成されているものの例として日比谷稲荷社や御穂稲荷社が、内部に独立して成立しているものの例として熱田明神社や日ヶ窪弁天稲荷社が挙げられる。図 1 からわかるように当時の実際は多重氏子として存在しているものがほとんどである。

注 40) 氏子分布の複層性は、前掲注 32 の「敷地役」の存在を前提にすると、近世初頭に定められた氏子の領域がのちに新興してきた神社によって虫食い状態となっていく過程として考えられる。

注 41) 遷座や再興と同様、幕府と将軍は同一主体であると考えられるが、各神社の由緒において特に将軍名が記されている場合にはそれを抽出した。

注 42) 「寺社書上」に記載されている神社の当時の社地はすべて寺社奉行支配下である。

注 43) 江戸市中における替地に関しては、李佶勲「江戸の元地と代地に関する研究」（『日本建築学会計画系論文集』第 75 巻第 649 号、2010 年 3 月）に続く一連の研究に詳しい。

注 44) 前掲注 4「寺社書上」[20]コマ番号 7-8。同上[78]コマ番号 6-7。同上[71]コマ番号 7。

注 45) 前掲注 4「寺社書上」[118]コマ番号 26。同上[115]コマ番号 62。同上[50]コマ番号 21。

注 46) 少林庵が沼地であった社地を持て余していたことから交渉が成立し、双方が古跡除地であったことにより幕府の認可をうけている（前掲注 4「寺社書上」[115]コマ番号 75）。このように神社が積極的に遷座するという事例は「寺社書上」においてはほかにみられない。

注 47) 前掲注 4「寺社書上」[46]コマ番号 50-51。遷座にともなう社地の再取得のプロセスに関しては詳細な研究が待たれるが、少なくとも「寺社書上」においては遷座に伴い社地を拝領したとの記述が多くみられる。

注 48) 吉田正高「解き放たれた大名屋敷内鎮守と地域住民」（江戸遺跡研究会編『江戸の祈り—信仰と願望』吉川弘文館、2004 年）、岩淵令治『江戸武家地の研究』（塙書房、2004 年）第 4 部第 1 章第 2 節など。

注 49) 前掲注 4「寺社書上」[69]コマ番号 7, 51。同上[51]コマ番号 8。家康は江戸入府当日に芝神明社に來訪し、「東国之伊勢」として銭一貫文下賜している。関ヶ原出陣の際には 2 社において立願しており、以降幕府の祈願所となったと考えられる。

注 50) 前掲注 4「寺社書上」[72]コマ番号 10-11。同上[41]コマ番号 30。

注 51) 他にも、五條天神社（上野一帯）や小野照崎明神社（坂本一帯）など。

注 52) 竹ノ内前掲注 3 書、pp. 215-220。

注 53) 前掲注 4「寺社書上」[69]コマ番号 110。

注 54) 竹ノ内前掲注 3 書、pp. 220-227。湯島天神社に関しては、氏子の存在は確認できるものの、氏子町名が記載されていない。

注 55) 境稲荷社（前掲注 4「寺社書上」[119]コマ番号 28）、清水稲荷社（同上[74]コマ番号 117）、富士見稲荷社（同上[24]コマ番号 121）、幸福稲荷社（同上[50]コマ番号 29）において氏子の減少が記されている。

注 56) 久留島前掲注 3 書、pp. 116-128。

A STUDY OF DISTRIBUTION OF UJIKO IN THE CITY OF EDO

Through analysis of enshrining, reconstruction and relocation of shrines described in “Jisha Kakiage”

Hiroki KOMINAMI^{*1}

^{*1} Grad. Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, The University of Tokyo, M.Eng.

Tokyo has a lot of shrines and these form complex and diverse Ujiko-iki areas at present. These territories were inherited from a situation of the faith in Edo period critically. In this paper, specialties of Ujiko in the city of Edo are understood deeply through analysis of enshrinement, reconstruction and relocation of shrines described in “Jisha Kakiage”.

Firstly, the distribution of Ujiko is restored from “Jisha Kakiage” and then the following three points are pointed out. First issue is that there were some shrines to account samurai residences as Ujiko. Second issue is that there were some towns to belong to several shrines. Third issue is that there were some shrines to have Ujiko towns locating in separate places.

In chapter 3, it is discussed that there were two types tutelary shrines for Edo castle town and for each town, samurai residence or temple in the city of Edo by analyzing enshrining and reconstruction of shrines described in “Jisha Kakiage”. Successive shoguns have enshrined new shrines and intervened some shrines by reconstructing these buildings or certificating lands. The intervention to shrines by shoguns has been strengthening the personal inclination than tutelary shrines against the whole Edo castle town. On the other hand, inhabitants in the city of Edo have enshrined new shrines and refurbished old shrines for tutelary shrines against each personal territory. While these tutelary shrines in same cases overlapped, there two types tutelary shrines. Almost of shrines to account samurai residences as Ujiko formed a territory of Ujiko above a whole district. This fact indicates that the relationships based on territorial acknowledgement between So-chinju, which is a big tutelary shrine guarding a wide district, and Ujiko of these shrines were established in the city of Edo. These shrines are almost same to tutelary shrines for Edo castle town in this chapter and divided territories of Ujiko without overlap. However, some communities of Ujiko consisted of a few towns or samurai residences were settled over the wide district territories of Ujiko. The above multi-layered territory is most important character of the shrine religion in the city of Edo.

In chapter 4, relocations of shrines are described in the transition of the city form of Edo from a medieval town to the premodern castle town by analyzing relocation of shrines described in “Jisha Kakiage”. Relocation of shrines were able to be classified continuous relocation or advanced one from the viewpoint to increase or decrease their precinct lands. The latter relocation has been executed by the shogunate government or sometimes Daimyo families in order to convert a meaning of shrine as an object of faith. Through these relocations, a lot of shrines were converted into tutelary shrines of new towns or whole districts developed for city functions. In the other words, the shogunate government and inhabitants in the city of Edo activated the land of Edo with shrines like the following. One is to build a shrine by enshrining or relocating from other places as a tutelary shrine. Other is to refurbish an original shrine of the land. Then, these shrines were sometimes relocated by the demand of the shogunate government or self-control and changed their place to guard. Some towns changed relationships as Ujiko when shrines were relocated to another place and the degree of faith swayed.

(2019年2月7日原稿受理, 2019年9月27日採用決定)